

# 文化財保護課

群馬県前橋市

## 大友屋敷III遺跡

開発行為（民間共同住宅建設）に伴う

発掘調査報告書

1987

前橋市教育委員会  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

## 序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山を望見する関東平野の北部を市域とした県都である。市域を南から北へ貫流する利根川の清流は市域を潤し、「水と緑と詩の町」前橋として、また古くから「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきた市であります。今、北関東の人口28万を擁し、生涯学習都市を目指し教育、文化、商工業の調和ある街づくりが進められ、中心市街地の再開発事業、土地区画整理事業、前橋工業団地・住宅団地の造成と、着実高く進められています。当大友屋敷Ⅲ遺跡の所在する利根川の右岸地域も土地区画整理事業による整備や民間の宅地造成による地域開発が盛んに進められています。前橋市元総社町12街区のこの地は、民間共同住宅の建設に先立って発掘調査を実施したもので、先の大友屋敷Ⅱ遺跡と区画街路を間に置き隣接しています。国府推定地内遺跡の寺田遺跡など多くの遺跡に近く、特に大友屋敷Ⅱ遺跡で検出の溝と比べ類似性の高い溝をB軽石下から確認するなどの他、遺存状態が充分ではないが、古墳時代中後期、奈良、平安時代の住居址5軒、土坑1基を確認しました。数多くの出土遺物の中には完形や復元可能な土師器、須恵器など約20点程検出されました。本報告書を刊行するにあたり建築主の鷹尾基久子様はじめ多くの方々から物心両面でのご協力いただき厚く感謝申し上げます。本報告書がこの地域の歴史解明の資料として少しでも利用される所があれば幸甚であります。

昭和63年2月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 関口和雄

## 例　　言

1. 本書は都市計画法第29条の開発行為（共同住宅2棟建設事業）に先かけた開発予定地の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は前橋市教育委員会のもとに組織された。前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　間口和雄）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町211-1 代表取締役 須永眞弘）が実施した。
3. 調査担当者 浜田博一（前橋市教育委員会管理部文化財保護室係長）  
　　遠藤和夫（　　同　　上　　主任）  
　　新保一美（　　同　　上　　嘱託）  
　　金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部長）  
　　白石光男（　　同　　上　　第二グループチーフ）
4. 遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。  
　　遺跡名 大友屋敷遺跡 略称 62A-27  
　　所在地 前橋市元總社町12街区3690-1  
　　調査期間 発掘調査 昭和62年9月21日～10月15日まで実施した。  
　　遺物整理 調査資料の整理まとめ、など昭和62年12月10日完了  
　　調査面積 210m<sup>2</sup>
5. 本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会のもとに保管されている。
6. 本書はスナガ環境測設埋蔵文化財調査部が作成に当たり、編集統括を金子正人が当たり、白石光男が執筆と造稿のトレスを行った。佐々木智恵子、角田朱美が遺物の実測とトレスをし、作業事務を柴崎信江が行った。
7. 測量作業の指導は須永眞弘（測量士第52614号）が行い、発掘調査の安全管理に荻野博巳が当たった。
8. 本調査に際して、多大なご協力を頂きました、開発行為者の鷹尾基久子氏や前橋市教育委員会及び地元市民の方々並びに調査及び整理に際して種々と御指導、御助言を賜わった各方面の方々に心より感謝申し上げます。
9. 調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（順不同）  
　　今井秀生、板垣 宏、須永嘉明、松岡和香江、河西三明、  
　　近藤充朗、小林康典、石川サワ子、原沢政雄

## 凡　　例

### 1. 遺構の略号

H - 住居址 W - 溝 D - 土坑

### 2. 実測図の縮尺

全体図 1/150 住居址 1/60 (カマド 1/30) 土坑 1/60 溝 1/80

土層断面図 1/40 遺物実測図 1/3

### 3. 現況図は「前掲現形図42」 S = 1 : 2500 を用いた。

### 4. 遺跡の位置の基準 X = 42955.000m Y = -70760.000m

基準点、国土地理院の三角点及び水準点

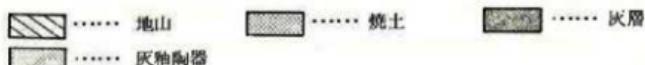
座標系 第K系

方眼 4m間隔

等高線 10cm

### 5. 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」による。

### 6. 掘図中のスクリートーンの表示は下記の通りである。



## 目　　次

### 序

### 例　言

### 凡　例

### 目　次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	5
第3章 調査概要	5
1. 調査方法	5
2. 経　過	6
3. 基本土層	6
第4章 遺構と出土遺物	6
1. 住居址と土坑	6
2. 溝	11
第5章 まとめ	12
実測図(1~4)	17
図　版(1~5)	21

## 第一章 調査に至る経緯

前橋市元總社町12街区3690-1に位置する本遺跡の周辺には上野国府推定地域や、国分僧寺・國分尼寺跡等が存在し古代群馬を知る上で大変重要な地域である。

前橋市は昭和20年8月5日の太平洋戦争の大空襲によって市街地の8割を焼失する被害を受けたが、昭和21年10月には中心市街地約300haを戦災復興土地区画整理事業に着手、群馬県と前橋市が施工者になり、いち早く復興に努めると共に、昭和29年には隣接町村を合併し元總社町、總社町などの利根川右岸の地域には、消費都市から生産都市への転換をはかるため都市計画決定を昭和33年の新前橋区画整理事業に統いて、同36年西部第1、同37年には西部第2、西部第3（西部第3總社明神）土地区画整理事業の計画決定がされた。昭和57年6月には前橋都市計画事業元總社（西部第三明神）土地区画整理事業が実施に移され、県都前橋としてまた広域経済圏の拠点都市を目指して着実に整備されている。かつて7世紀の上野国の中心地上野国府を今、都市計画事業によって再構築している状況です。

新都市計画法は昭和43年（法律第100号）で「都市の健全な発展と秩序ある整備を図り……」を目的に施行され、これを受けて、前橋市は宅地開発指導要項（前橋市告示第10号）で開発行為に対する同意（都市計画法第32条の規定）をするため、開発行為事業の行政指導に当たっている。市教育委員会では「開発行為の土木工事」と「文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条の2（土木工事等のための危険に関する届出及び指示）」との調整と行政指導にあたっている。大友屋敷Ⅲ遺跡は開発行為者（協議事業者）鷹尾英久子（住所東京都太田区田園調布二丁目47番10号）氏から共同住宅2棟（住宅30戸）の建設を目的に昭和62年7月23日付け宅地開発事業事前協議書が提出（市長あて）され、また市教育委員会教育長あてに同氏より埋蔵文化財確認調査の依頼があり昭和62年7月24日担当職員をもって調査を実施し、7月26日付けで調査結果を依頼者に回答した。

### 調査結果回答書の抜萃

#### 1. 調査方法

現地調査、文献調査、地形調査

#### 2. 表面採集調査の結果

採取した資料なし

地形観察 前橋台地

周辺遺跡 元總社明神遺跡群、大友屋敷Ⅱ遺跡、堀越遺跡

#### 3. 意見

中請地には盛土がなされ遺物の採取は不可能であるが、隣接地は大友屋敷Ⅱ遺跡の本発掘現場である。この現場からは東西方向の溝を検出している。この溝と中請地内を南北に走行している溝との関連が国府域を廻るか否かの重要な問題を含んでいる為試掘調査の必要があるものと判断するものである。

以上抜萃

市宅地開発事前協議審査委員会から文化財保護室長宛7月31日付で事前協議に対する意見が求められたことについて、8月5日付で推定国府城にかかる重要遺構が予測されるため試掘調査の必要ある旨通知した。また8月1日付で開発行為者（鷹尾英久子氏）から教育長宛に試掘調査の依頼書が提出されたので8月20日に試掘調査を実施した調査結果等は9月1日付で開発行為者に回答した。

試掘調査結果の回答抜萃

1. 試掘面積 120m<sup>2</sup>

2. 調査方法

開発予定地の東西南北に確認トレントを幅1.2mで3条設定した。次にバッタホウで確認面まで掘削を行い遺構の検出に勤めた。また地層の観察記録を行い遺跡の有無について検討した。記録資料として写真撮影と測量も併せて実施した。

3. 調査結果

検出した遺構 …… 住居址 4軒

ビット 2基

溝 1条

検出した遺物 …… 土師器片 若干

須恵器片 若干

4. 意見 中請地の西北に住居址4軒を検出した。うち1軒は区画整理以前の構築物である倉庫の基礎によって残存率が悪いが、3軒は比較的残りの良い状態であった。前述の倉庫のため中の大半は擾乱を受け遺構の検出は出来なかった。北側トレント西半分の3軒の住居址を中心し発掘調査の必要がある。（以上抜萃）

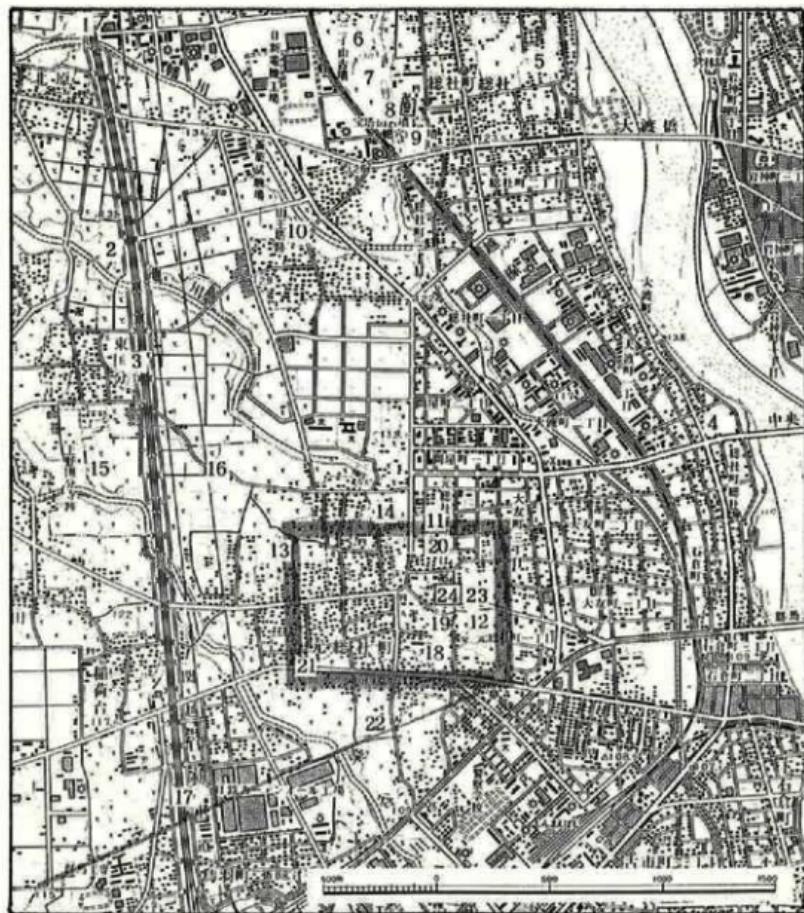
昭和62年9月7日付で教育長宛に「埋蔵文化財発掘調査について」（依頼）が鷹尾英久子氏名で申請されたのを受けて、昭和62年9月8日付け前教文（附第195号教育長名で前橋市埋蔵文化財発掘調査団宛「民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」を受けて文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条第1項に規定する「埋蔵文化財発掘調査」の届出を前橋市埋蔵文化財発掘調査団長名で文化庁長官宛手続きを行った。

調査面積 210m<sup>2</sup>（全面発掘）

発掘調査の期間 自 昭和62年9月24日

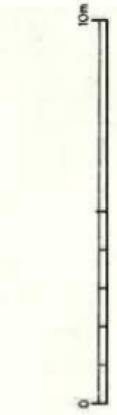
至 昭和62年10月16日

以上、調査に至る経過を記すものである。



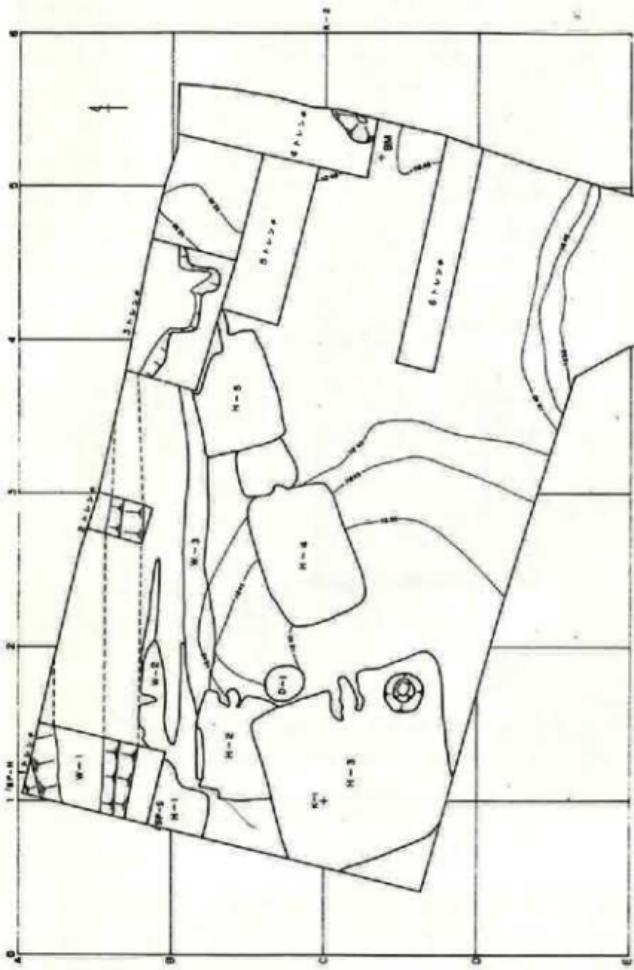
第1図 周辺の遺跡

1 下 東 西 遺 跡	2 國 分 墳 遺 跡	3 國 分 寺 中 間 地 域 遺 跡	4 工 山 古 墳
5 遠 見 山 古 墳	6 総 社 二 子 山 古 墳	7 愛 容 山 古 墳	8 宝 塔 山 古 墳
9 蛇 穴 山 古 墳	10 山 王 施 寺 遺 跡	11 開 泉 横 遺 跡	12 元 總 社 明 神 遺 跡
13 草 作 遺 跡	14 上 野 国 府 城 (推 定)	15 上 野 国 分 僧 寺	16 上 野 国 分 尼 寺
17 鳥 羽 遺 跡	18 元 縍 在 小 学 校 校 庭 遺 跡	19 寺 田 遺 跡	20 開 泉 横 南 遺 跡
21 天 神 遺 跡	22 東 山 道 (推 定)	23 大 友 屋 敷 Ⅲ 遺 跡	24 大 友 屋 敷 Ⅳ 遺 跡



第2圖 大友尾數Ⅲ遺跡全體圖

座標  
K-1 X = 42955.000 m  
Y = -70760.000 m  
K-2 X = 42955.000 m  
Y = -70780.000 m



## 第2章 遺跡の位置と環境

前橋市はその地形や地質から見て、赤城火山斜面地帯と河床地帯である広瀬川低地、そして、前橋泥流の堆積による前台地等に区分できる。本遺跡のある大友屋敷Ⅲ遺跡はこの前台地上に位置し、榛名山系の河川である牛池川によって形成された平坦な微高地に立地している。また遺跡の東約300m付近には、市道大友西通線（通称産業道路）が通り、南には主要地方道である前橋・群馬・高崎線が走っている。遺跡の周囲は畠地であり、西約400m付近に上野国總社神社を望む。

本遺跡が所在する前橋市元總社町12街区3690-1番地周辺は、古代上野国の政治・文化の中心的地域であり、「倭名類聚抄」に記述されている上野国府の推定地域でもあるため、関連ある遺跡の所在が注目される。閑泉隨遺跡や閑泉隨南遺跡また元總社男神遺跡、寺田遺跡等では幅約7mの規模を持つ大溝が確認されており、国府城との関わりが注目されている。最近ではこの大溝と交わるのではと考えられる幅5m程の溝が大友屋敷Ⅱ遺跡で確認された。また元總社小学校校庭遺跡では、官衛の一部と思われる柱穴も見つかっており上野国府解明にとって大変重要な地域である。集落址においても天神遺跡、草作遺跡、元總社明神遺跡等で確認調査されており、国府と集落の関係が興味深い。また国府城の近くには宵道である東山道や国分僧寺、国分尼寺跡等も存在し奈良時代から平安時代にかけて、古代上野国の中心的様相を帯びた地域であったことが窺われる。

## 第3章 調査概要

### 1. 調査方法

前橋市教育委員会は事業者である鷹尾恭久子氏の調査依頼を受け大友屋敷Ⅲ遺跡の試掘調査を行った。試掘方法は北と南側各1本ずつのトレンチ（東西方向）と、この両トレンチ間に南北方向のトレンチ（筋堀り）1本を約1.2m幅で設定し試掘を行った。地断は北側トレンチ2箇所南側トレンチ1箇所計3箇所で確認した。試掘面積は約120m<sup>2</sup>であり、その結果北側トレンチから住居址、土師器、須恵器等の遺構遺物が確認された為本調査を行うことになった。

本調査は北側トレンチを中心に行い調査面積は210m<sup>2</sup>で昭和62年9月21日より10月15日まで実施調査を行った。表土剥削の深さは60~80cmの間で行いプラン確認後、測量基準を標高11250m、座標をK-1地点でX=42955.000m、Y=-70760.000m、K-2地点でX=42955.000m、Y=-70780.000mに設定しこれを基準として調査区を北西隅より鉛線をABC…Eまで、経線を012…6まで各々4m幅のグリットで設定した。また各グリットの呼び方は北西交点を使用した。溝はトレンチと試掘にて方向、深さ、幅等を確認調査した。住居址はカマドを基準にベルトを設け土層観察を行った。カマドは残存状態のよいものは十字に切りそれ以外は半裁し、土層観察を行いその後造り方を調査した。貯蔵穴、土坑は半裁し土層観察後完掘を行った。出土遺物は覆土中のものは表探として取り上げ遺構に伴うものは遺構ごとに一括としたが、重要であると判断したものは図面に記録後取り上げた。写真撮

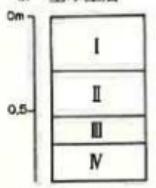
影は遺構、全体、空中写真等で行い、使用フィルムは白黒、リバーサル、で撮影記録した。

## 2. 経過

大友屋敷Ⅲ遺跡の調査期間は、昭和62年9月21日(月)～10月15日(木)まで行われた。実働日数は20日間である。以下日誌より抜萃。

- 9月21日～24日 休憩場所、発掘機材の整理、運搬作業。キャリーダンプによる耕土の運搬作業。
- 9月25日～29日 グリット杭打ち作業、表土ジョレン掻き後プラン確認と土層観察作業とセクション図の作成。
- 9月30日～10月2日 プラン確認に沿って住居址、溝の調査開始。写真撮影開始。
- 10月3日～7日 4号住居、5号住居の平面測量と写真撮影。1.2.3号住居の調査、土坑の調査、遺物取り上げ開始。
- 10月8日～12日 1号住居、2号住居、3号住居、土坑、溝の平面測量と写真撮影。土層観察作業とセクション図作成。各住居址カマドの調査と図面作成。
- 10月13日～15日 全体図1/50にコンタを落とす。気球を使用し空中撮影。発掘機材等の撤収作業。大友屋敷Ⅲ遺跡発掘調査終了する。

## 3. 基本土層



第3図 基本土層

I層 盛り土

II層 暗褐色土層 B.P.、F.P.を含み粘性は有るが粒子粗い。

III層 黒褐色土層 粘性が有り土質は密で締りは良い。

IV層 黒褐色土層 C.P.を多く含み粘性が有り土質は密で良く締まっている。

## 第4章 遺構と出土遺物

### 1. 住居址と土坑

#### a 1号住居址 (H-1)

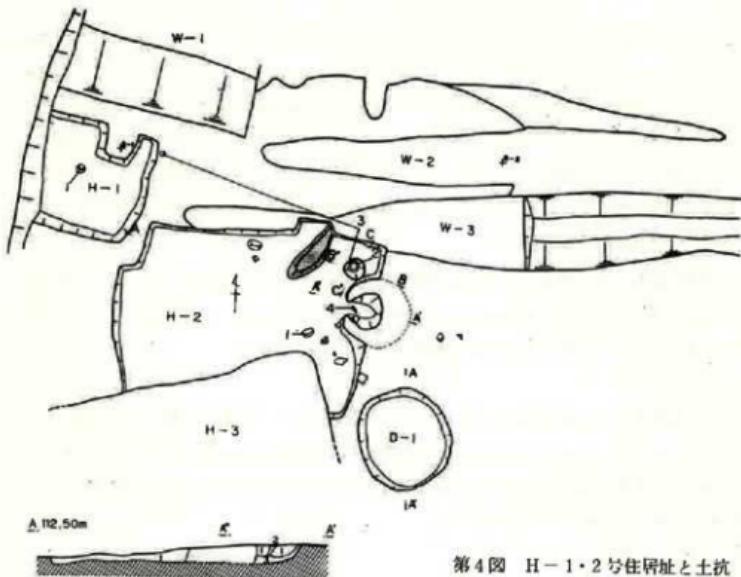
本住居址は西壁B-1グリット付近に位置し、1号溝により切られている。ほとんどが調査区域外であるが平面プランは方形であると思われる。調査した範囲での規模は南北約1.5m、東西約1.1mを測る。床面については締りのない状態であり確認するのが困難であった。

カマドは殆ど形をとどめず焼土範囲を残すのみであった。

出土遺物は須恵器・杯・高台杯・皿等6点ほど数えるがH-1に関係あると思われる物は高台杯1点しかなく、その他は覆土中の出土である。時期的には国分期に比定されよう。

#### b 2号住居址 (H-2)

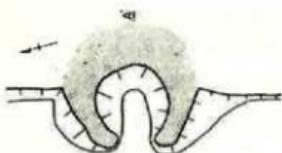
H-2は調査区西壁よりに位置しH-3との前後関係がはっきりしなかつたが、H-3の壁の



第4図 H-1・2号住居址と土坑

土層注記（H-2とカマド）

1. 明褐色土層 粘性が有り土質は密である。CP、ロームブロック、炭化物を含む。



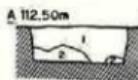
土層注記（H-2カマド）

1. 明褐色土層 茶土・CP、粘土ブロックを含む。粘性はない。
2. 明褐色土層 土質はあまり含まず、【層の間隔の様】である。
3. 明褐色土層 烧土・CPは含まれない。粘性はある。



土層注記（D-1）

1. 明褐色土層 粘性が良く粘性が有りCPを全層に含む。所々に炭化物が見られる。
2. 黒色土層 粘性に富み土質は密である。CPは含まず所々にロームブロックが見られる。



土層注記（H-2出土遺物）

1. 明褐色土層 粘性が有り土質は緻密である。CPを含み所々に炭化物が見られる。
2. 暗褐色土層 粘性が有り土質は緻密である。CPは含まない。

第5図 H-2カマドと出土遺物

立ち上がりが認められたため、H-3により切られておりH-2がH-3より先行する事が確認された。平面プランは長方形を呈し、W-3やH-3が重複しているため正確なプランは僅認出来なかつたが、調査範囲内で推定すると南北約1.9m、東西約2.5mを測り、主軸方位はN-113°-Eである。壁高はカマド付近では約20cm程で西に行くに従い低くなる。床面は比較的しっかりとおり西方向に傾斜している。カマドは東壁に付設してあった様だが焼土が残っていただけで原形は殆ど留めていなかった。又、脇には炭化物を含む焼土の存在が認められカマドのはかにも火の使用があったと思われる。

出土遺物は総数181点を数えるが復元可能なものは4点であった。またカマド脇からほぼ完形の杯が高杯の上に乗りセッテで出土したことは注目される。その他、円板（土師器）も出土した。和泉から鬼高Iにかけての遺物を中心に出土している。

#### c 土坑（D-1）

本土坑は調査区域で1基を数えH-2とH-3の重複するすぐ東隣に位置し上・下端径約1m、深さ約40cmを測る。底は平底であり、形状は円形プランで壁面は垂直に立ち上がる。巻土はC輕石粒を含み炭化物を疎らに含んでいたが量としてとらえるには至っていない。又、出土遺物は土師器の小片を10点数えるのみであった。

#### d 3号住居址（H-3）

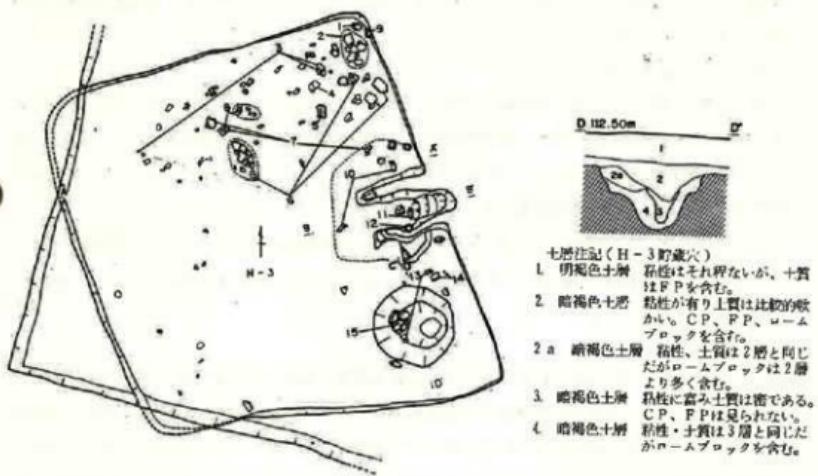
本住居址は調査区南西隅に位置し、本調査区内で一番残存状況の良い住居址であった。北西・南西隅のコーナーは、調査区域外であったため正確な平面プランは確認出来なかつたがほぼ正方形を呈すと思われる。規模は南北軸長で約4.5m、東西軸長で約4.5~5mを測り、主軸方向はN-73°-Eである。壁高は約20~40cmぐらいであり西壁に行くに従い低くなつて行く。床面は平坦であり比較的やわらかい床面で所々にC輕石混じりの貼り床が見られる。貯蔵穴は、ロート状に2段に掘られ、円形プランで上幅約110cm、中幅70cm、下幅約30cmを測る。深さは約55cmである。また中段付近から土圧により押しつぶされた土師器の壺が出土した。

カマドは東壁中央部に付設されており主軸方向はN-78°-Eである。全長は120cm、最大幅約90cm、燃焼部長約50cm、焚口部長約40cm、燃焼部幅約40cm、焚口部幅約40cmを測り住居址内に長く張り出している。袖石、天井石、支脚石とも凝灰岩の切り石で造られており、袖石、天井石は鳥居状に組まれていたようだ。灰層の地積状況が良く厚さ5mm程の灰層がカマドを囲むように分布しておりカマドの使用頻度の多さが窺われる。又、検出状況から見て北から南にかけて力が加わったのか天井石は中央から二つに折れ右袖石は脇に飛ばされていた。

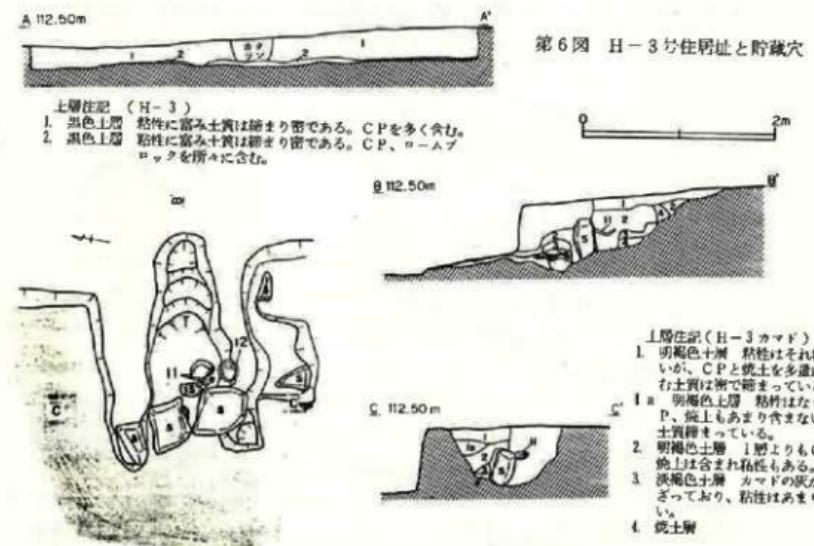
出土遺物は総数639点を数えるが、その内復元可能なものは杯、壺など15点であった。遺物は住居址北壁隅から多く検出された。又、カマド内より2個体の杯が検出されたが、カマドの崩れたときに流れ込んだ様である。H-3出土遺物は時期的には鬼高Iあたりに比定出来よう。

#### e 4号住居址（H-4）

H-4は調査区中央に位置する。平面プランは東西に長い長方形で南北軸長約3.4m東西軸長約2.5mを測り主軸方向はN-70°-Eである。壁高は約10~17cm程を測り立ち上がりは直



第6図 H-3号住居址と貯蔵穴



第7図 H-3カマド

線的に立ちあがる。床面ははっきりせず跡り方も普通である。カマドは東壁中央に付設されたと思われるが、原形はとどめておらず、施土範囲が確認できる程度であった。出土遺物は土師器片、須恵器片 81 点を数えるが、復元可能なものは土師器の杯 1 点のみであった。時期的には真間期あたりが妥当かと思われる。

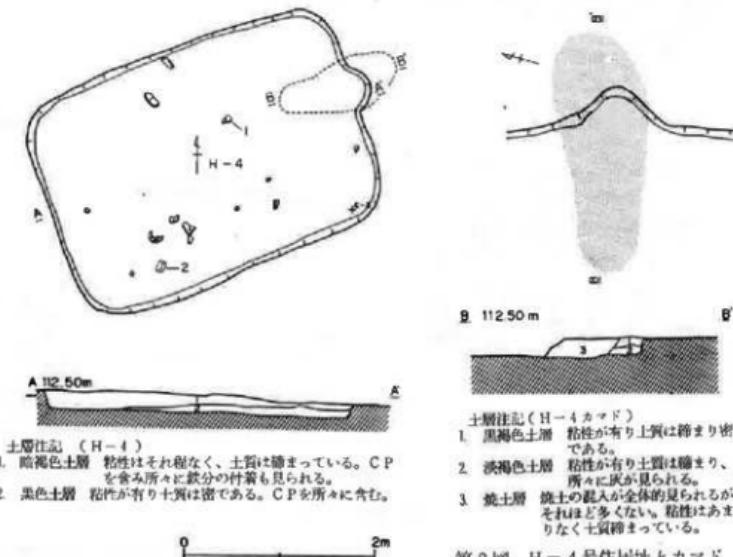
#### f 5号住居址 (H-5)

H-5 は、調査区北壁寄りに位置し平面プランは長方形を呈し、主軸方位は N-72°-E である。南北軸長は約 2.9 m を測り、東西軸長は W-3 と重複関係にあり推定が約 2.1 m を測る。壁高は約 13 cm 程であるが明確な立ち上がりは確認できなかった。床面は凹凸がありはっきりせず貼り床はみられない。縛りは普通である。

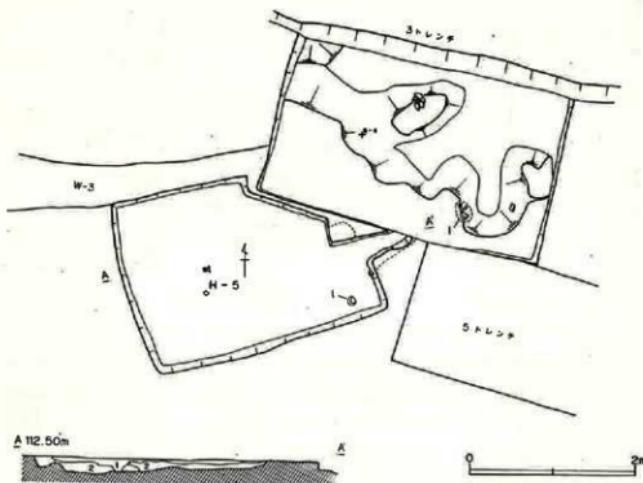
カマドは東壁の中央南寄りに付設されたと思われるが残存状態は良くなく、焼土範囲を残すのみであった。出土遺物は土師器片 17 点を数えるが復元可能なものは杯 1 点のみである。時期的には鬼高 I に比定できよう。

#### g その他

3 トレンチ内には住居址が存在したと思われるが調査の段階では確認できず遺物だけが出土した。遺物は復元でき時期的には鬼高 I に比定出来よう。また表上掘削時に西壁上にカマドの両袖石が検出され住居址の重複が見られた。出土した遺物は 657 点数えるがその大部分が小片であり、器形的な特徴は判断しかねた。しかし、須恵器においては 5 点ほど実測可能なものが出土しており、実測は可能ではないが、その特徴が推察できる遺物が出土しており時期考察が出来た。出土遺物はおもに真間期を中心に国分期迄のものが多いようだ。



第 8 図 H-4 号住居址とカマド



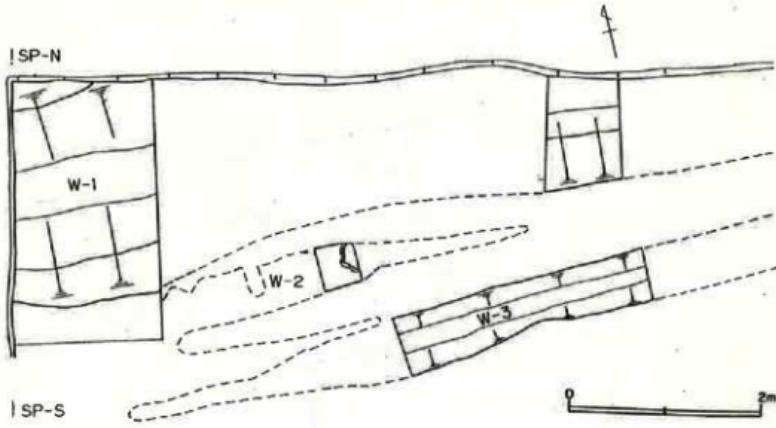
- 土壌注記 (H-5)
1. 黒褐色土層 粘性はそれほどないが土質は良く締まっている。CPを含む。
  2. 黒色土層 粘性があり土質は締まっている。所々に3~4cm程のロームブロックを含む。

第9図 H-5号住居址

## 2. 溝

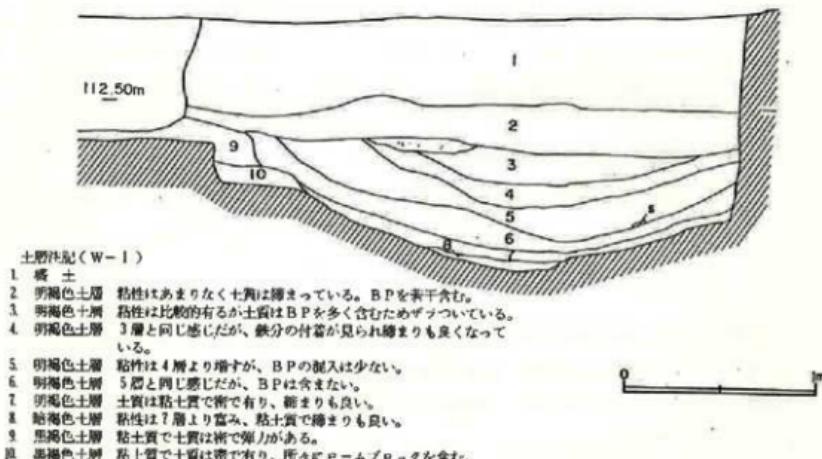
本遺跡では、3条の溝が確認されており調査区北壁側から1号溝(W-1)、2号溝(W-2)、3号溝(W-3)と調査した。W-2とW-3は西壁方向に行くに従い確認できなくなつて行く為両溝とも溝と呼ぶには疑問が残る。調査区内での長さはW-2で約9m、W-3で約10m程を測り、出土遺物は検出しなかつた。W-1は1トレンチと2トレンチにて確認調査した。調査区内北西隅から北壁中央部に向かってほぼN-90°-Eで走行する。B軽石層は確認できなかつたが、上層の2、3層でB軽石の混入が認められる。溝幅は推定で上幅は約3.6~4.0m、下幅は70cm、深さは確認面からの深さで約85cmを測る。調査区内での長さは約8m程である。断面形は緩やかなU字形を呈し、立ち上がりは20°前後で立ち上がる。又中段を有し溝底は固い砂礫質で良く締まっており標高は約111.45mを測る。又、中段付近には、水の流れていた事を示す浸食の痕が認められた。

出土遺物は覆土中から土師器、須恵器の小片56点が数えられるが摩耗しており流れ込みによるものと思われる。



SP - S 113.30 m

SP - N



第10図 W-1, 2, 3号溝と土層断面図

## 第5章 まとめ

今回の発掘調査により、確認された遺構は住居址5軒、溝3条、土坑1基であり出土遺物は総数1694点を数えた。

住居址の内訳は古墳時代中期1軒(H-2)、後期2軒(H-3、H-5)奈良・平安時代2軒(H-1、H-4)であるが住居址として遺存状態の良いものはH-3のみであった。出土遺

物も全体の約3.8%を占め、その多さが窺える。H-2はH-3より先行する住居址であるが構築位置は比較的浅い位置に構築されており、この傾向は元總社明神遺跡等の報告の中でも述べられている。カマドはH-3以外の作居址では遺存状態は悪く焼土範囲の確認のみであったが、各住居址とも東壁中央部には付設されていたと考えられる。H-3のカマドに用いられていました切石は凝灰岩の切石であり、前記の元總社明神遺跡等でもその検出例が見られる。

出土遺物についても和泉期～国分期まで出土しており、その範囲の広さが窺われる。特にH-2より出土した高杯と杯のセットは遺存状態もよく、高杯は富士見村田中田遺跡<sup>(注1)</sup>13・37号住居址内より出土した遺物にその類例が見られる。溝については、3条(W-1、W-2、W-3)検出したがW-2、W-3は途中で途切れてしまい溝として機能していたかどうかは調査段階では確認できなかった。

今回検出されたW-1は調査区北西隅壁沿いに位置しておりトレンチ調査であったため、正確に確認できない点があったが、ほぼN=90°-Eに走行しており、前回調査した大友屋敷Ⅱ遺跡<sup>(注2)</sup>のW-2と同一の溝であると考えられる。又元總社明神遺跡では溝の位置関係についての報告<sup>(注3)</sup>がされており、それによると昭和58～60年度に確認された南北方向の大溝と東西方向の大溝を基に1町ごとにメッシュで区切るとそのメッシュ上に各々の溝が重なり合うとしている。本遺跡のW-1と大友屋敷Ⅱ遺跡のW-2を座標を基にこの上に落として見ると東西方向の大溝<sup>(注4)</sup>(開泉橋遺跡)から南へ4町の位置を東西に走行していることが確認された。そして、時期的な差はあるが1町と3町南に東西方向に走行する溝の検出例があるため、これらとの関連も興味深い。又、大友屋敷Ⅱ遺跡のW-2とW-6はB軽石下の溝であると思われるため、南北に走行する大溝との関係が注目される。そしてまた、山崎一氏に拠る沿海城縄張り図(1978)に記載されている。丹波守護の堀跡から東に走行する堀跡と木溝<sup>(注5)</sup>とが重なり合うため、今後、沿海城堀跡とB軽石層下の大溝を考察する上で本遺跡の存在は極めて重要であると思われる。

最後に開発行為者である(藤尾基久子氏)と御指導して戴いた方々、また、調査に参加した方々に深く感謝し、ここにまとめと致します。

〈注〉

(注1)「元總社明神遺跡V」 1986 前橋市教育委員会

(注2)「富士見村田中田・霞谷戸 古墳遺跡」 1986 富士見村教育委員会

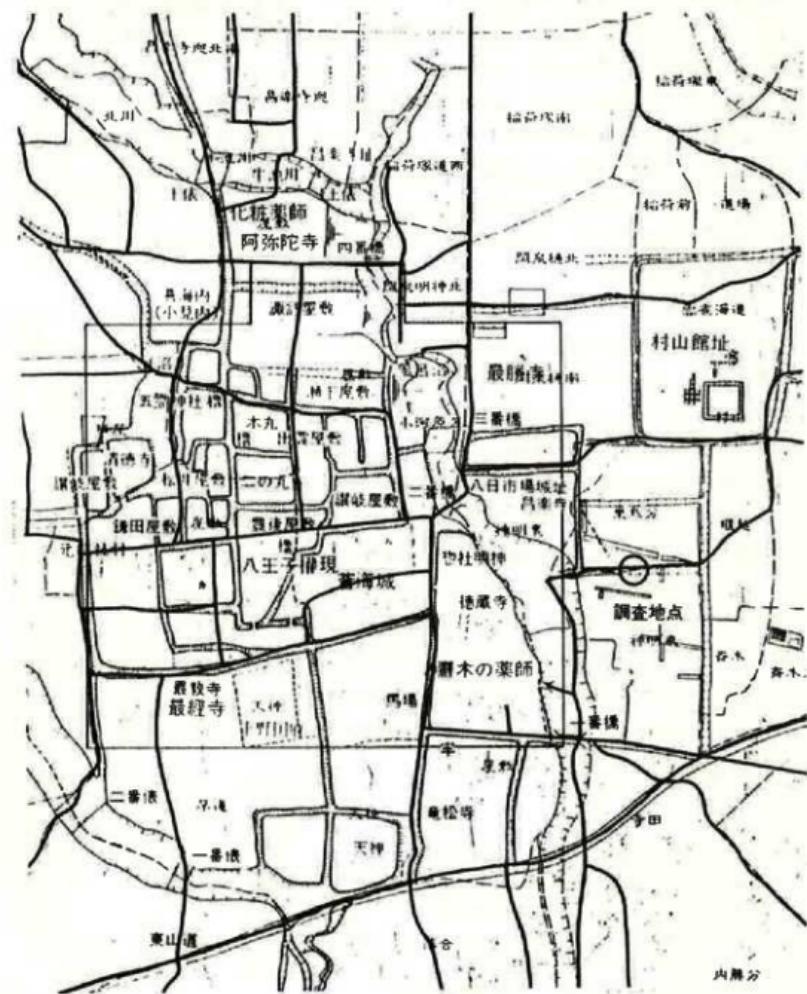
(注3)「大友屋敷Ⅱ遺跡」 1987 前橋市教育委員会

(注4) 大友屋敷Ⅱ遺跡のW-2は北東方向に走行しており、内溝とも溝底のレベルが1115cm前後で、同レベルで断面形も類似しているため同一の溝と思われる。

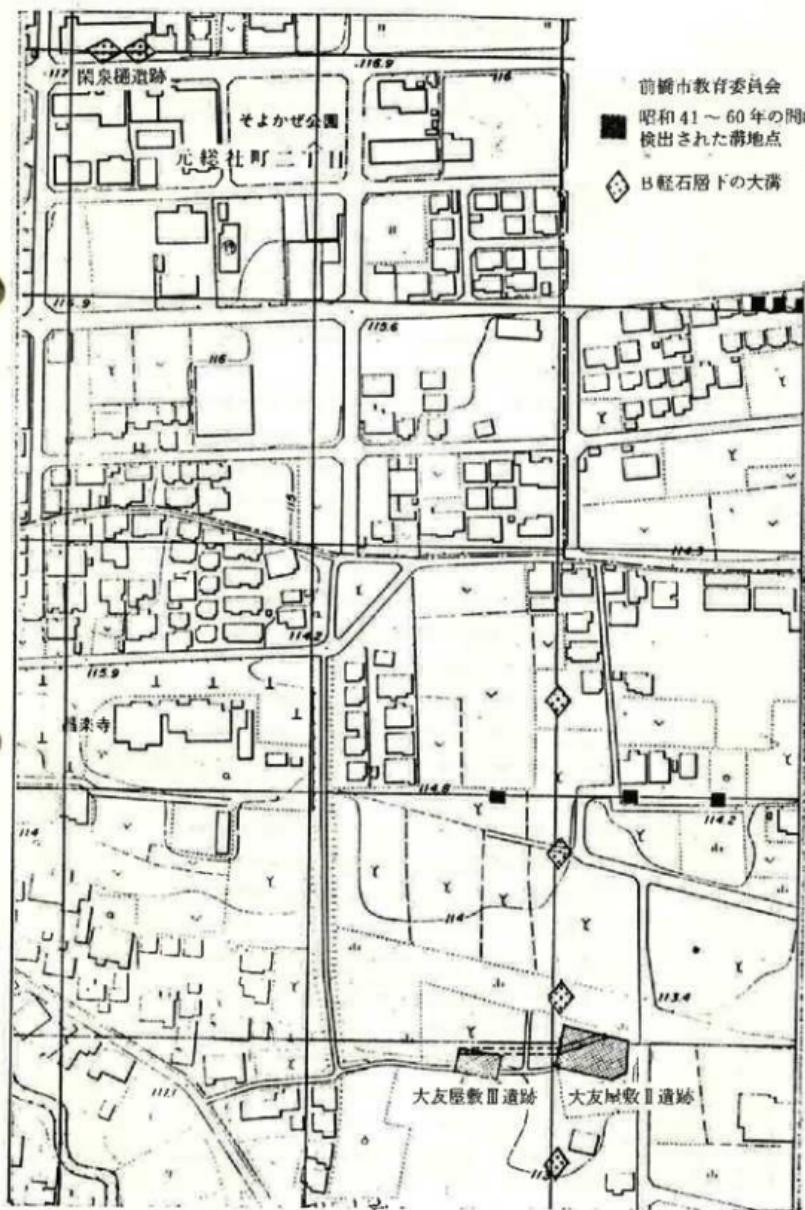
(注5)「元總社明神遺跡III、IV」 1986 前橋市教育委員会

(注6) 第12回参考 前註の報告書付刊より抜萃

(注7) 第11回参考 「上野野分寺・尼寺中間地城」 1986 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の付録より抜萃



第11図 黃海域縄張り図

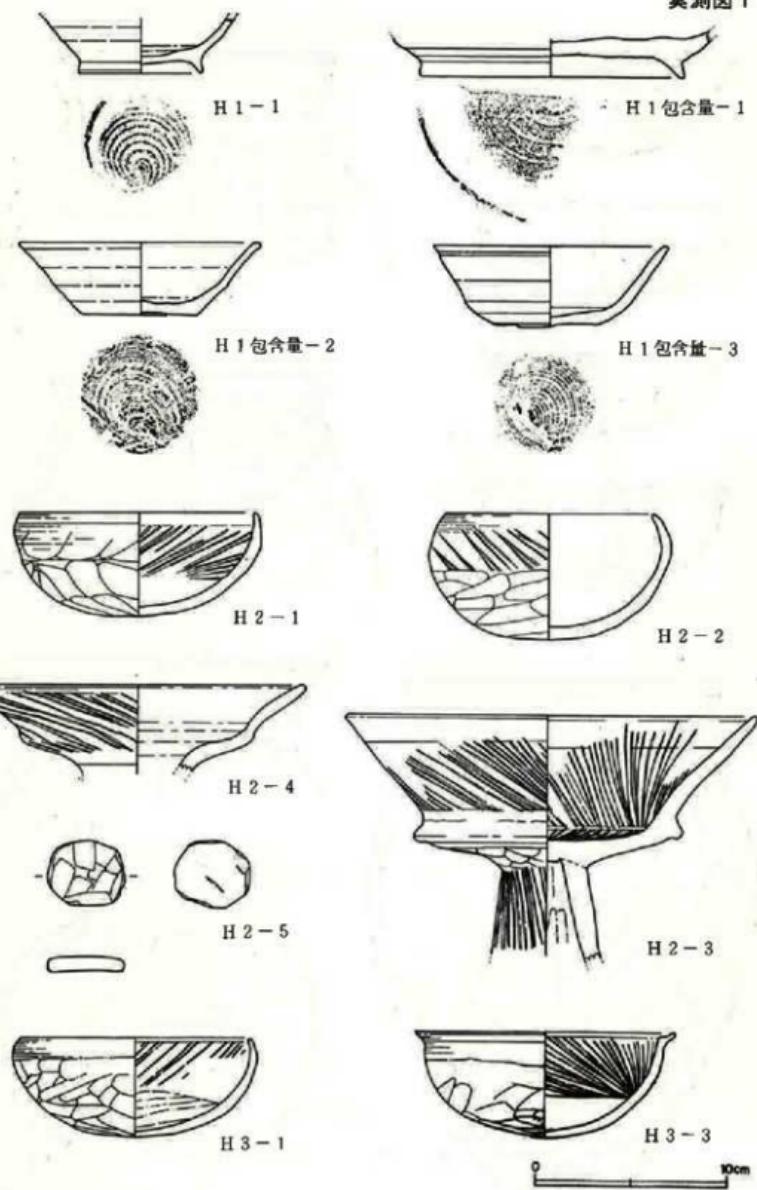


第12図 現況図

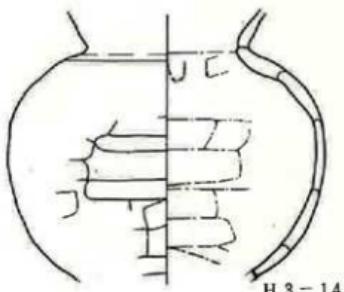
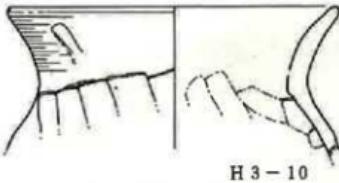
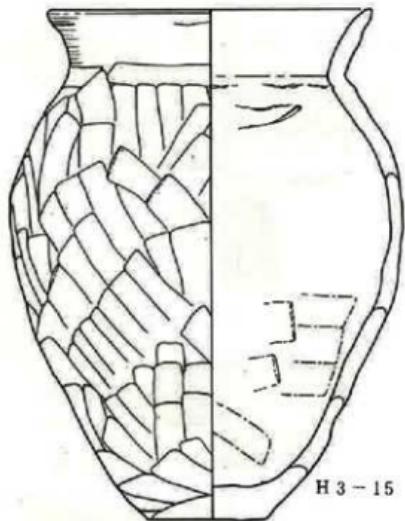
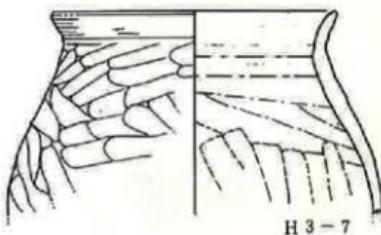
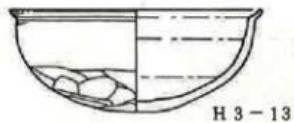
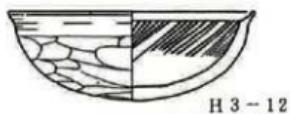
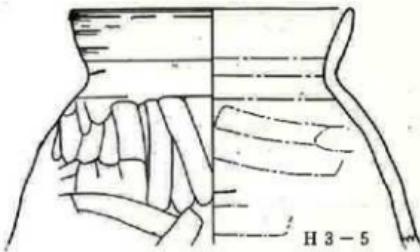
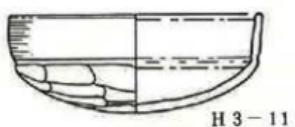
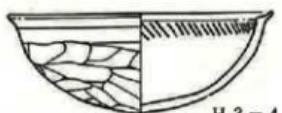
### 大友屋敷遺跡出土遺物觀察表

法値の( )は推定値

実測図 1

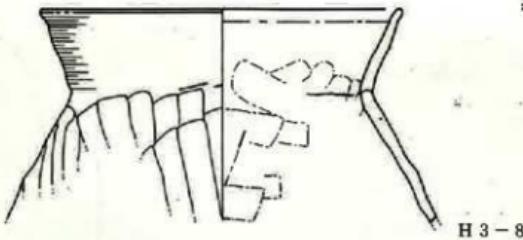


実測図 2

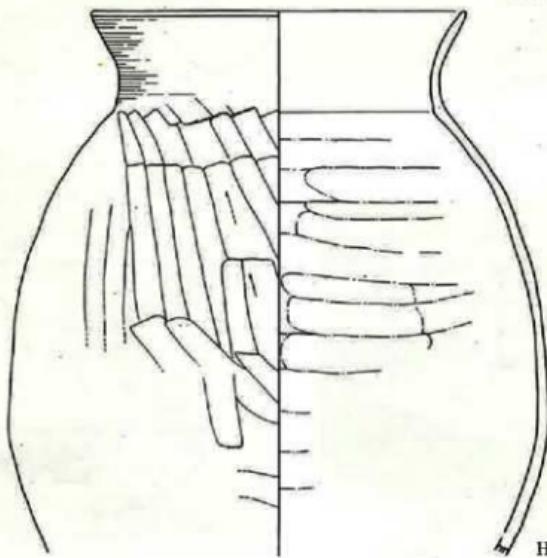


0 10cm

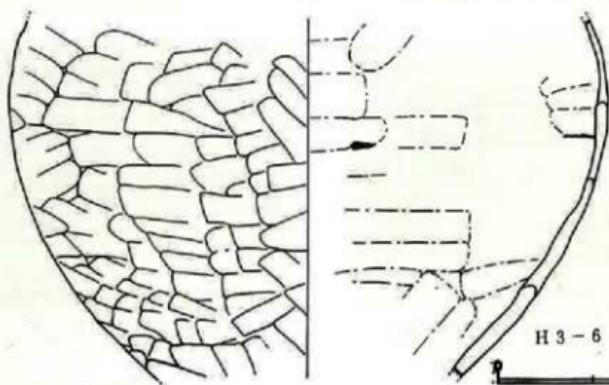
実測図 3



H 3-8



H 3-2



H 3-6

10cm

実測図 4



H 3 - 9



H 4 - 2



H 4 - 1



トレンチ 3 - 1



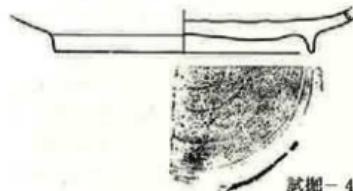
試掘 - 2



H 5 - 1



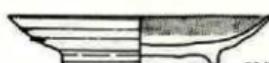
試掘 - 1



試掘 - 4



試掘 - 3



試掘 - 5



図版 1



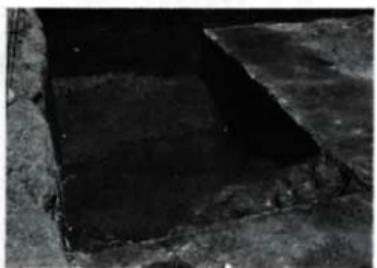
道路全景（南より）



道路上空（東より）



W-1, W-2, W-3（西より）



1 トレンチのW-1（南より）

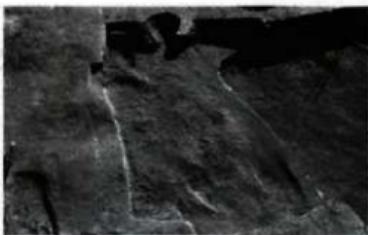


2 トレンチのW-1（西より）

図版 2



H-1 (西より)



H-2 (西より)



H-2 土器出土状況



H-2 土器セット出土状況



H-2 土器とセクション(北より)



H-2 土器とセクション(西より)



H-3 (西より)



H-3 土器出土状況(北壁:一ナーラ)

図版 3



H-3 カマド天井石出土状況



H-3 カマド内土器出土状況



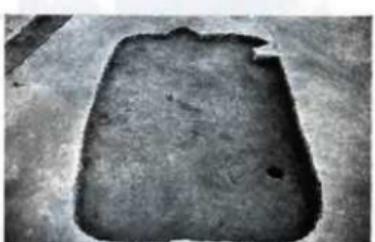
H-3 カマド



H-3 藏穴と土器出土状況



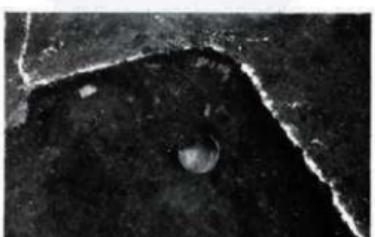
H-4 土器出土状況



H-4 (西より)



H-5 (西より)



H-5 土器出土状況

図版 4



H 1 - 1



H 3 - 1



H 1 包含層 - 2



H 1 包含層 - 3



H 3 - 2



H 2 - 1



H 3 - 3



H 2 - 2



H 3 - 5



H 2 - 3



H 2 - 2, 3 セット

図版 5



大友Ⅲ遺跡

印刷	昭和 63 年 2 月 15 日
発行	昭和 63 年 2 月 20 日
編集	スナガ環境測設株式会社
発行者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷所	前橋市教育委員会
	サクラヤ印刷所